やっと動き出した専任への道

石川県　石川・学校図書館を考える会
金沢に豊かな学校図書館を願うボランティアネットワーク
志村由紀子（市民）

「石川・学校図書館を考える会」は、1994 年にすべての子どもたちの成長を支える学校図書館に期待して、学校図書館が日常に機能し、その可能性を発揮するために不可欠の専門・専任・正規の司書の配置を願って作られました。発足以来、学校や公共の図書館員、教員、議員、読書ボランティアなど様々な立場の方が会員になって支えてくださり活動してきましたが、2016 年からは会員制をやめ、石川県との共催研修会とホームページを中心とした活動をしています。

発足した時には県内の司書はゼロでしたが、翌年の 1995 年に小松に 1 名配置されたのを皮切りに県内の市町村で配置が進んで毎年増えていき、2021 年では 204 名の司書が配置されています。（詳しくはホームページをご覧ください）

ところが、県内の司書配置が進んでいく中、金沢では司書配置の動きはまったく見られませんでした。それどころか、2001 年に「金沢市の子どもたちに司書のいる学校図書館」を願っていた私たちの耳に飛び込んできたのは、「学校図書館ボランティア養成講座」開催の案内であり、「司書教諭とボランティアによる学校図書館運営」という方針でした。ボランティアが入ることは、司書配置の妨げになるのではないかという不安から、この講座を受けるべきかどうか随分悩みましたが、とりあえず受講することにしました。

その当時、県内の司書数は 50 名になっていて、石川・学校図書館を考える会の役割は、当初の司書配置を願う声を届けるということから、配置された司書の支援や研修といったことも考えていくようになっており、いまだに司書配置のない金沢市と運動の方向性が違ってくるようになりました。そこで発足したのが、「金沢に豊かな学校図書館を願うボランティアネットワーク」（以下「ボネット」）です。

しかし、会を立ち上げたものの何をどうすればよいのかわかりませんでした。そんな時、出会ったのが『みんなの図書館№239　2001 年５月号』に掲載された伊藤紀久子氏の「学校図書館ボランティア活動から見えてきたこと－学校図書館ボランティアの可能性と限界―」でした。伊藤氏は、ボランティアの可能性をたくさん挙げた上で、限界としては「ボランティアは図書館の形は作れても機能は果たせない」ということ、ボランティア活動を通しての気付きを行政や図書館、議員に提言していくことの大切さを伝えていました。これを知ったことで、私たちはボランティア活動を否定的に捉えることから解放され、多くのボランティアと読み聞かせや学校図書館について学びながらつながり、行政とのパイプ役の役割を果たし、専任配置を願う声をあげていきました。教育委員会の方たちも、よく理解してくださり、その時その時でできる限りの予算を引っ張り出してきて、人の配置を進めてくださいました。

2004 年度に、国の予算で「学校図書館支援員」が 4 名配置されました。2006 年度には、名称を変え、「学校図書館コーディネーター」として 5 名の配置、2010 年度

には、また名称が変わり「本の先生」が８名配置されました。（金沢市の小・中学校数は約 80 校です）この時点では 10 校兼務となります。

そして 2011 年、「石川・学校図書館を考える会」のごく初期からの会員で、ボネットにもずっと関心を寄せ応援してくれていた市会議員の中から、マニフェストに司書配置を挙げた市長が誕生しました。これによって、2011 年７月から、「学校司書」という名称で 21 名が配置されました。

その後、2012 年度には 31 名、2013 年度には 40 名と順々に配置が進められてきましたが、すべての学校司書が 2 校兼務となったところで、それ以降は「司書配置検証の年」という名目で、計画はストップされ、その後の増員はありませんでした。ただ、その間、金沢独自の取り組みで、「学校図書館総括」（※１）「学校図書館アドバイザー」（※２）「主任学校司書」（※３）という役職が作られ、充実した司書研修、また総括による学校訪問、アドバイザーや主任による司書支援などにより、学校図書館活用は活発になっていきました。

そして、７年間の停滞のあと、2021 年度に「小学校への計画的専任司書配置」の方針が出されたのです。学校司書３名が増員され、６校の専任校が誕生、2022 年度には３名の増加、新たに６校が専任校となりました。専任配置が実現したかげには、学校司書や先生方の頑張りがあり、２校兼務という苦しい状況下でも、学校図書館の力を発揮させ、同時に現場からの声を上げてきてくださったことも大きいと思います。また、私たちボネットが、フェイスブックで情報を発信したり、毎年、教育委員会や議員に粘り強く声を届け続けたりしたことも実になったのかなと思っています。

ただ、身分はすべて会計年度任用職員（週 29 時間）であり、学校司書は５年雇用、その後試験を受けた場合に、さらに５年働くことができます。そして 10 年満了時、主任になるための試験を受けて主任になると５年働くことができます。しかし、いずれにしても期限付きの雇用で最長でも 15 年しか働くことができず、せっかく積み上げた経験が蓄積されない制度で大変残念です。専任・専門・正規の声をあきらめることなく、上げていかなければならないと思っています。

そして、忘れてはならないのは、小学校の専任化が計画的になされていくとはいえ、中学校についてはまったく触れられていないことです。多くの中学校では，今でも司書が来校しない日は学校図書館に鍵がかかっています。

学校指導要領はどんどん変わり、今や、図書館を使わない学びは考えられなくなっている中で、一日も早く金沢市のすべての小中学校が専任校になることを願っています。

※　学校司書・学校図書館アドバイザー・主任学校司書を指導、総括する立場。年に１回は全校を訪問し、校長・司書教諭により良い図書館教育を促す。また、司書研修を企画する。

※　学校図書館総括とともに学校訪問・司書研修内容の検討を行う。また学校からの要請に応じて、司書支援を行う。

※　主に初任者に対しての指導・助言を行う。学校図書館総括とともに研修内容を検討する。

学図研ニュース№437（学校図書館問題研究会 2022.7．1 発行）より許可を得て掲載しています。